



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.137

2015.2.1

※HP刷新致しました

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## ● 神村 透

## 田舎考古学人回想誌

41

## 「利のため文化財無視驕る開発側・無知無力の地教委・間で現地協議」

私が県教委に入った43年は日本がGNPで世界2・3位と経済的利潤を追う最中でした。住民は生活の利便と向上を、そのためにはと行政は開発中心の施策に走り、埋蔵文化財保護についてはその物を知らないか、知っていても開発の邪魔だという驕り無視が目立つ。地教委に埋文担当がいなく、いても埋蔵文化財について無知であったり、首長部局からは無視されたり、協議しても押し切られ迎合するような処置しかできなかつた。

林茂樹先生が県庁内部局を説得して漸く42年12月25日『長野県における公共開発事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて』の通達を出す、それがどれだけ職員に読まれていたか。一度回覧されただけで職員が人事異動で変われば全く読まれていなく棚に仕舞い込まれた。林先生が地教委に説得するに当たっては熱意の姿勢が誤解されて強姿勢ととられて分かってもらえないこともあった。

私が直面した最初の現地協議は霧が峰の中央高原スカイライン(ビーナスライン)でした。企画部が立案し、企業局に事業実施を委ねた。40年白樺湖一強清水間が着工・強清水一和田峠間が話題になり、旧御射山遺跡の史跡指定と天然記念物八島湿原の中をルートが通る計画が問題となり分布調査をする。遺跡と湿原の保護が大切という市民運動が急速に高まり、マスコミも大きく取り上げ保護活動は一気に全国的に注目された。新田次郎が『霧の子孫』の小説でこの問題を書いている。紆余曲折あったがルートは南回りに変更されて遺跡と湿原は保護された。こうした観光道路優先の開発に対して私は「開発と保護の対立の中で」と題して分布調査報告書後書に寄せたら、企業局職員が読んで教委にクレームがきて、私は課長から叱られる。

押し切られたのは農政部の農業センター計画でした。41年 農業試験場の長野市郊外への移転が具体化し用地候補地が幾つか挙がり大室に決まったのは42年で、農政部では用地内に古墳が分布することは知っていた。大室古墳群は

県史跡であったが35年指定解除となっていた。500余基の中での22基位は、多くが盗掘されているので幾つか残せば良いのではと軽く考えていた。用地買収の問題もあって秘密裏に計画が進められ、この計画が県教委に知らされたのは42年7月であった。農政部からの県教委への協議はなく、農政部も長野市もお互いにはぐらかし、事業窓口が農協中央会と分かったのは43年7月でした。担当は農政部農業改良課と分かり県教委の指導で漸く8月現地調査、9月用地内分布調査で32基を確認し、同月文化庁の現地視察で開発計画から古墳を除く、詳細な分布調査をするよう指導される。12月分布調査をした。44年農政部は予算がついたのと5月協議もたれ、9月当初3基の保存というのも出来るだけ保存との方針に変更された文書が県教委にきた。現状保存21基・記録保存11基と最終決定されたのは10月。億を越える予算消化のためには12月20日にブルトーズを入れるという強姿勢に押し切られ、急遽、大室古墳群調査会を作り、発掘調査団を組織する。地元研究者からは協力を拒否され、駒澤大学・京都大学の協力と中央道調査員として確保していた2人を中心に8日から26日までの年末で寒さ厳しい中での慌ただしい調査でした。私は現地指導者として関わったが調査員の方々には申し訳なかったと思うのみ。開発側に一方的に押し切られた調査でした。

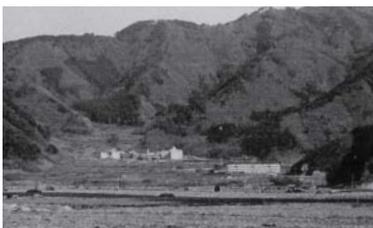
明暗分けた二つの峠。県内には東山道が縦断し西の玄関神坂峠・東の玄関入山峠がある。神坂峠は峰越林道の計画があり42年確認分布調査をし、文化庁・県の指導により国県補助事業で阿智村が43年発掘調査をして峠祭祀遺跡であることを確認する。結果国史跡に指定された。入山峠は碓氷バイパス計画があり群馬県と長野県の関係者が41年現地協議する。44年工事が具体化し11月に長野県のみで分布調査をする。群馬県側に遺跡があることを確認するが、群馬県と松井田町は消極的で軽井沢町が主体となって発掘調査をし、バイパスが通り遺跡は破壊された。

幾つもの現地協議に関わって県教委の・私の無力さを痛感した2年でした。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



▲下伊那側から見た神坂峠



▲大室古墳群の中に農業試験場農業大学

## 目次

■田舎考古学人回想誌	利のため文化財無視驕る開発側・無知無力の地教委・間で現地協議	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第130回)	榎本剛治 …3
■考古学の履歴書	過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第4回)	岡田淳子 …2	■考古学者の書棚	「ホット・ゾーン」上・下	井上尚明 …4

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第4回) 岡田 淳子

## ④古墳調査のさまざまな想い

後藤守一先生と一番弟子の大塚初重助手(当時)は、お二人で東日本の古墳研究に取り組んでおられた。私が最初に調査に参加したのは、常陸丸山古墳の発掘調査であった。この古墳は「豊城入彦命(トヨキイリヒコノミコト)」の墓と伝えられていて、地元ではそれを証明したいという思惑があったらしい。

「書かれたものでも入っていない限り、証明できるわけがない」後藤先生はそう言われていた。茨城県内では大きな前方後円墳で、比較的古いものと聞いていた。調査が始まって内部主体が表れると、朝もやの中、顕彰会の信者の人たちがマウンド上に陣取って、何か唱えて拝んでいる。その人たちも真剣であることが察せられた。

この調査は、晩秋の授業期間に行われたので、参加できる人は限られていた。墳丘の測量を進めると前方後方墳だったことが分かり、内部主体は木棺・粘土槨(床)、私は未経験者なので、内部主体の調査には手を出さず墳丘上で手伝ったが、それでも墳丘の測量など、古墳の発掘調査の順序や、方法を学ぶには充分だった。

副葬品として、多くの玉類や銅製・鉄製の武器とともに内向花文鏡が発見されて、これが次の問題を生んだのである。

朝日新聞に『朝の鏡』という小説が連載された。作家は、明大文学部の阿部知二先生で、私は家に配達された朝日新聞を見て、非常に驚いた。私が丸山古墳の調査日誌に書いた、覚えのある文章がそのまま、結構長く載っていたのだ。紅葉の真っ盛り、真紅のモミジを痛めるのに忍びなくて「科学は美の破壊者だと思った」などとペダンティックな書き方をしたのだから、それが目にとまったのだろうか。調査に参加した女子学生の記した調査日誌、女子学生は私一人だから小説とは言いながら実録、当時の恥ずかしさは譬えようも無かった。先輩からは「原稿料を貰いましたか」と聞かれ、私は日誌をどこで見ることができたのかと危ぶんだ。調査日誌だから秘密の記録とは言えないが、充分プライバシーの披瀝になっている。このことがあってから、私は日誌を事実の羅列だけに変えた。年齢を重ねていけば受取り方も違っただろうが、社会経験の少ない大学生初期のことである。

大塚初重先生が大まかなながら必要な情報を毎日的確に流してくださって、私たちはいつも調査を把握していられた。今でも尊敬している岡本勇さん、李進熙さん、西川宏さんの3先輩は、また別の角度からこの調査を見ていた。芹沢長介さんは、写真を撮る時だけ集中的に仕事をされ、それ以外は紅葉の木の下で休んでいた。

話題は変わるが、古墳発掘の最初の日に、後藤先生が「年寄りには人畜無害だから」と部屋のシェアを申し出てくださった。これは私にとってもったいない提案で、どんなに嬉しかったとか。部屋の隅で、若い男性たちの目を気にして着替えなくてもよい。私は注意して就寝の支度をし、「お休みなさいませ」と失礼の無いように、離れてはいたが並んでいた寝具を少し下の方へずらして床に着いた。その後、後藤先生との宿泊はこれが定位置になった。



▲1952年12月1日撮影 後列左より:西川 宏、李 進熙、岡本 勇  
前列左より:中山(岡田) 淳子、大塚初重、一人おいて後藤守一 撮影:芹沢長介

先生は「每晚、寝る前に本を読むから、明るいままで寝られますか」と問われた。私は「頭が枕についたと思ったら寝ている」と母に言われるほど寝つきが良かったので、全く心配はない。しかし、私も先生の真似をして、翌日からは本を読むことにした。なぜそんな話題になったのかは定かでないが、先生はご自分の研究の成就が才能では無く、努力の結果であると言われ、特にこの学問は努力の積み重ねがいかに大切であるかを諭された。私にとっては力になる教えであった。

翌年、この古墳の近くでもう一つの前方向後円墳の調査が行われ、大塚初重先生の指導で測量と2重に巡っていた埴輪列の調査が行われ、私も参加した。この古墳は丸山3号墳と名付けられ、先年発掘の古墳は「常陸丸山1号墳」となった。私は墳丘のコンターを描くレベル取りの仕事を任せられ、偉そうに3センチ下とか、1センチ上などと大声で怒鳴って、そのコツをつかんだ。夕暮れを迎え、明るさが限界になった時、大塚先生はマッチを擦って、必要な部分を明るく照らし出してください、私はますます張り切って箱尺を読んだ。

愛知県の積石の古墳群は、結構高い丘の上にある群集墳で、毎日、山を登り降りした。月の輪古墳と同じく連日の登山である。麓の寺院の庫裡に泊めていただいたのだが、五右衛門風呂で、その水を三日経っても代えて貰えない。それならば自分たちで取り換えようと相談がまとまり、その日、私は山に登らず、図や資料の整理と水入れ替えの仕事を受け持つ役目になった。無事、役目を果たしたまでは良かったが、夜、お寺のお坊さんから可なりきつく叱られた。「水は貴重だから一週間は代えてはいけない。一週間使ったその水は肥料として畑に撒く」という。昭和20年代の、日本が貧しい時代ではあったが、都会育ちの私は、暮らしの違いをまざまざと知った経験であった。

## 略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 130

## 伊勢堂岱遺跡 ～秋田県北秋田市～

榎本 剛治

## ○4つの環状列石

伊勢堂岱遺跡は北秋田市脇神字伊勢堂岱に位置する。縄文時代後期前葉（約4,000年前）の環状列石を主体とする遺跡である。これまでに4つの環状列石を中心に、配石遺構、掘立柱建物跡、土坑墓、柱穴、溝状遺構などの遺構が検出されており、大規模な祭祀の場と考えられている。平成11年に開港した大館能代空港へのアクセス道路建設に先立ち、平成6年から秋田県埋蔵文化財センターが調査を行ったところ、平成7年に環状列石AとBが発見された。また、環状列石Aより南側で直径0.6～1mの柱穴群が検出された。これらの柱穴は亀甲型に組みあい、6本柱の掘立柱建物跡になることは大湯環状列石や、高屋環状列石（鹿角市）の調査成果から知られていることであるが、平成8年の調査でその配置は環状列石Aとは逆方向を弧状に列をなしていたのである。同心円状に広がる建物群の内側には環状列石がある。つまり、3つ目の環状列石が存在したのである。

このように、当時3つの環状列石が確認されたことで、大手新聞社の1面記事として取り上げられたことは、学生時代の私にとっても強く印象に残っている。

その後、地域住民や県民が遺跡の現地保存を求める声が高まり、平成8年12月に秋田県は道路を迂回させ、遺跡を現地することが決定した。さらに、調査の主体が鷹巣町に移管され、環状列石Dの発見につながり、平成13年1月には国の史跡に指定されたのである。

## ○調査担当として

さて、生まれも育ちも千葉県である私が平成13年に秋田県に来て、この伊勢堂岱遺跡の担当になったのは、史跡指定の直後である。平成17年3月には市町村合併で北秋田市が誕生するなど、今振り返ればあわただしい時期だったと思う。

調査担当者になって、一つ思い出に上げるならば、列石外周で検出される6本柱の掘立柱建物跡の性格解明である。学史上では「台上墓」、「平地式住居」、「マツリの施設」など

議論があり難しい問題だが、まず、過去の調査の遺構配置図を再検討し、亀甲型の柱配置の中心に焼土遺構が重なることが多いことに気づき、焼土遺構は建物に伴う炉跡である可能性を立てた。ただ、ある程度の広い面積を調査しなければ建物群を検出できないこともあり、仮説を検証することは容易ではない。ある日、環状列石Cの外周には方形の配石遺構が2基検出されている。よく観察すると2基とも6ヶ所の隙間がある。この遺構が掘立柱建物跡の一種であると考え、発掘したところ、その「隙間」に柱跡を検出し、建物範囲の中心部分に炉跡を検出した。このことから建物跡が平地式の建物跡である可能性を指摘した。もちろん未だ異論もあると思うが、掘立柱建物跡の構造と機能のうち、構造について、問題提起をできたと考えている。

このような成果を踏まえ、平成22年度には発掘調査総括報告書を作成した。印刷も大詰めになった平成23年3月には起きた東日本大震災のため予定していた報告書表紙が届かず、仕方なく有り合わせのものに変更したことは忘れられない思い出の一つである。

## ○整備と活用

調査と並行して史跡整備も同時進行した。平成17年から史跡地内の公有化を始め、平成23年から5ヶ年計画でガイダンス施設建設が始まった。平成28年度春にオープンを目指して取り組んでいるところである。

その過程で、遺跡を保存するために迂回した県道が、日本海沿岸東北自動車道の一部として再び整備されることになった。一般的な工法で建設された場合、遺跡と道路が同じ高さになり、4つの環状列石のすぐ隣を車が往来し、白神山地を一望できる景観が損なわれる可能性があった。しかし、秋田県は遺跡の景観を保護するために、環状列石から目立たない位置に高速道路を建設することにした。つまり、遺跡に隣接するように秋田内陸縦貫鉄道が通っていることから、鉄道のさらに下をトンネル工法で通過する設計になった。よく「高速道路が第3セクターの鉄道の下を通ることは極めて珍しい」と冗談混じりで言われる。とにかく、遺跡本体を保存するために道路などの工法を変更することは、近年でこそ多くなったが、環状列石の景観を守るために工法を変更することは全国でも極めて稀ではないのだろうか。このような取り組みは表立って取り上げられることがないが、秋田県が文化財に対する思いが良く伝わる事例である。我々も史跡整備をしっかりと完成させて伊勢堂岱遺跡を含む18遺跡で構成される「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」が早期に世界文化遺産へ登録されるように、頑張りたいと改めて心に誓ったのである。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは吉川耕太郎さんです。



▲伊勢堂岱遺跡全景

## 考古学者の書棚

## 「ホット・ゾーン」上・下

リチャード・プレストン著／高見浩訳／飛鳥新社(1994)

井上 尚明

2014年になってから、デング熱・RSウイルス・エボラ出血熱などの感染症が話題になっている。また、この冬はインフルエンザの流行も例年より時期が早いと報道されている。デング熱では感染者が出て、代々木公園が閉鎖されたり、エボラが疑われる帰国者があったりと、これほどウイルス感染症が話題になった年も珍しい。

「ホット・ゾーン」は小説ではなくノンフィクションであり、医師や研究者あるいはエボラ出血熱から生還した元感染者からの聞き取りをもとに構成されている。ホット・ゾーンとは、危険なウイルスが存在したり保管してある場所のことで、エボラウイルスを扱える特殊な施設は「レベル4」と呼ばれ、宇宙服着用が義務付けられている。因みにHIVはレベル2である。日本は先進国では唯一、レベル4に対応する施設が稼働しておらず、ウイルスを扱った治療などの研究を進めることができない国である。

さて、エボラ出血熱は、エボラウイルスが原因の致死率が90%を超えることもある感染症で、中央アフリカビクトリア湖近くのエルゴン山キタム洞窟が発生地とも言われ、コンゴ川の支流エボラ川からその名がつけられている。ビクトリア湖の北西岸は、HIVの発生地の一つともされており、破壊力や感染力は比較にならないが、免疫系を攻撃するウイルスという点で両者は近い存在である。

「森の中に何かがいる」。これがこの物語のスタートである。1980年1月1日から始まり、多少時間を前後しながらストーリーは展開していく。ウガンダとケニア国境にあるエルゴン山のキタム洞窟に入った者から感染が広がり、エボラウイルスが潜んでいた地点とされている。熱帯雨林での血と血の接触から人間界に流入し、感染するとあらゆる組織の中で増殖する。宿主を「炸裂」「放血」させ、さらに死体を「分解」「融解」させていくと表現されるほどに、激的な症状が紹介されている。1976年10月には、感染した看護婦が2日間キンシャサをさ迷い歩き、大勢と接触し人類絶滅の引き金となるのではと問題になったことがある。病院を舞台にした拡大例であったが、この時は、モブツ大統領による軍の動員と封鎖・射殺命令が出され、米軍も待機するなど臨戦態勢がとられたが、対面接触での感染拡大はなかった。

エボラ出血熱の発生はアフリカだけではない。北ドイツの街マールブルグのワクチン製造を行う施設で、工場従業員が感染して死亡し、他にも30人以上の感染者が発見された。これは、輸入したアフリカミドリザルからエボラウイルスが人間に感染したもので、マールブルグウイルスと呼ばれることになった。マールブルグウイルスは、エボラウイルスと同根のもので、他にはエボラスーダン、エボラザイルがあり順番に感染力と症状は激しくなる。また、ワシントン郊外のレストンにある、モンキーハウス（検疫所）でフィリピンから輸入したサルからエボラが発見され、CDC（疾病対策センター）や陸軍研究所が出動して制圧したが、この時にはサル間での

空気感染が疑われた。

最初にこの物語を読んだ時に、強烈なインパクトだけではなく、我々が集落遺跡などを発掘する際、その増減や住居数の変化に伝染病のような影響がなかったのかとの疑問が浮かんだことがある。これまで、感染症などが人口増減や集落立地にどういった作用を及ぼしたかなど、あまり考えたことがなかったのも、この物語で述べられた「コンゴ川やエボラ川では、いくつかの村が消滅したり、衰退していくといった情報がジャングルの奥から伝わってきて・・・」のくだりは刺激的であった。縄文中期に集落が増加することや、晩期になると集落規模が小さくなるなどの現象は、気候や生態系の変化などと関連させた理解もされている。しかし、果たして原因はそれだけだったのだろうか。

1995年に公開された、ダスティン・ホフマンが主演した「アウトブレイク」では、ウイルス感染が広がった村を焼夷弾で焼き払うシーンが登場する。この映画では架空のウイルスを扱っているが、舞台はザイルの密林の中の村であり、モデルとなったのはエボラであることは明らかである。村や住居を焼き払うという行為は、伝染病が流行した時にしばしば用いられる措置であり、熱によって病原菌などの駆除する方法である。

このような視点で発掘現場を俯瞰すると、たびたび調査で遭遇する火災住居や、類焼したと考えてきた被災住居群について、失火や宗教行為だけではない理由を想起してしまう。森林に囲まれた縄文時代などにおいて、森の奥へと進出していく過程で、縄文人は未知の多くの動植物や昆虫と遭遇したであろうし、動物の解体や調理では血の接触もあったに違いない。キタム洞窟の中では、サルだけではなくコウモリやクモ、あるいは象の排せつ物などが温床ではないかと疑われた時もあった。縄文時代の森の奥で、人間という都合の良い宿主を見つけたウイルスが存在した可能性はなかったのだろうか。

2014年の流行では、「放血」がない症例もみられることから、エボラ出血熱からエボラウイルス症と呼名を変えると報道されている。しかし、特效薬がないという点ではこの本が書かれた時と何ら進展はなく、今でも人類にとって最も危険なウイルスであることには変わりはない。また、エボラはエイズとともにサルと人類を横断するウイルスであり、前述のとおり発地点もビクトリア湖近くの密林の奥である。人類のテリトリーではない密林の深奥部に進出したことへの、まさに「密林の復讐」とも呼べる自然界から人類への警告かもしれない。

## アルカ通信 No.137

発行日	2015年2月1日
企画	角張淳一(故人)
発行所	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
	TEL 0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : <a href="http://www.aruka.co.jp">http://www.aruka.co.jp</a>